

R. W. フォーゲル・S. L. エンゲーマン

『試練のとき』

Fogel, Robert W. and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross*; vol. I *The Economics of American Negro Slavery*, vol. II *Evidence and Methods*, Little, Brown & Company (Inc.), Boston, 1974, xviii+286 pp. vi+268 pp.

本書は、アメリカの南部奴隷制経済に関する従来の支配的な見解に対して、‘計量派’の立場からの問題提起を集成した、全2巻からなる力作である。主要な論点は第1巻において一般向けに解りやすく説明されており、推定手法や資料についての立ち入った考察は、すべて第2巻にまとめられている。2人の著者によれば、奴隷制南部についての通説は、その骨子をおよそつぎの2点に要約することができるという。すなわち、(1)自然条件による限界や綿花の過剰生産、あるいは都市化の進展等によって、単純で非効率的な黒人奴隷労働に基礎をおく南部農業は、経済的にも行き詰りの状態にあったこと、および(2)それ故に奴隷制南部諸州における奴隷所有は、労働力を既成農場において利用することではなく、奴隷を飼育し新開諸地域に売却することを主要な目的としていたこと、の2点がそれである。

ところで奴隷制南部についてのこのような見解が、リベラル派であるかマルクス主義史家であるかを問わず、共通して支配的な見解であったことは注目に値する。奴隷制南部の経済的帰結についてのマルクス自身による説明は、つぎのようなものであった。“綿花、タバコ、砂糖等々の南部輸出商品の奴隷による耕作は、それらが、簡単な労働しか必要としない自然的に肥沃な広大な土地において、奴隷の大集団をもって、大規模におこなわれるかぎりにおいてのみ、収益をあげるものである。土地の肥沃度よりも資本投下、労働の知能と活動力に依存するところの多い集約的な耕作は、奴隷制の本質と矛盾する。(中略)新准州の獲得は、一部の奴隷所有者たちが新しい肥沃な農場を奴隷によって開拓するために、そして残余の部分の奴隷所有者たちにとっては奴隷飼育の、したがって奴隷販売のための新市場が形成されるということのために重要なものとなった”(『北アメリカの内戦』『全集』第15巻、大月書店、p. 319)。

このような通説のもつ致命的な欠陥は、南部奴隷農業の資本主義的性格を過小評価し、奴隷制の崩壊の原因を自然上の限界等に求める点にある。奴隷制をこのような

経済決定論の立場から位置づけるときには、南北戦争は経済的敵対関係に基礎づけられたイデオロギー抗争としての側面だけが強調され、奴隷制南部をひとつの生活文化圏として、北部のそれに対立しうるまでに発展させたものが何であったかについての考察が、当初から欠落してしまうことになる。他方では、奴隷飼育による投機を目的として奴隷所有がおこなわれていたという見解は、過酷で専横な奴隷主によって、長い期間にわたり性的搾取をうけてきた黒人という独特のイメージをつくり出す。その結果として生み出された黒人(および南部白人)についてのさまざまな固定観念とこれに基づく人種主義によって、通説はともすればこれらを正当化する‘学問的’根拠となってきたのである。

たんなる力づくだけで人間が人間を長い期間にわたって抑圧することが不可能であるとすれば、白人奴隷主が奴隷制を強化する方策として、横暴で専制的な支配しか思いつかなかったと考えることは、余りにも不自然にすぎるといえよう。このような観点からの通説の批判と、北部の正当性と同じように南部の正当性をも承認すべきであるという主張は、本書よりも以前に、たとえばユージン・D・ジェノヴィーズによってもなされている(『奴隷制南部についてのマルキシズム的解釈』、B・J・パーンスタイン編『ニュー・レフトのアメリカ史像』所収、琉球大学アメリカ研究所訳、東大出版会)。彼と本書の著者たちとは、“ちょうどリベラルな改良主義が資本主義を強化してきたように、奴隷制の改良や改善が奴隷制を強化した”ことを積極的に承認している点で、全く軌を一にしているといえることができる。しかしこのような立場をとることに対しては、いつもながらの反応が彼等の周囲にも起ったであろうことは想像に難くない。事実、本書の最終章の冒頭には、2人の著者がしばしば出くわす例の質問が紹介されている。この種の誤解を最小限にとどめるためには、本書はまずこの最終章から読み始められるのが適当であると思われる。“狭い経済分析に専念し、さらに悪くいえば、日の当らぬ諸階級を美化することに専念してきた”のは、ジェノヴィーズのいうアメリカのマルキストだけとは限らないからである。

前おきがやや長くなりすぎたが、以下では順を追って本書の内容を簡単に紹介しよう。序章につづく第1章では、大西洋奴隷貿易の起源と、アメリカにおける奴隷制の展開過程が概観されている。そこではラテン・アメリカの場合と比較したときの合衆国における奴隷制の特徴として、砂糖産業が未発達であったことにより、黒人の対人口比率ならびにプランテーション当りの奴隷労働も小

規模にとどまったことがあげられ、米国における奴隷人口の増加が、主として自然増加によるものであることが強調されている。第2章では、奴隷社会における就業構造と、タバコから綿へと主力産業が転換するのに伴って生じた奴隷人口の地域間分布の変化がとりあげられている。著者たちはまず、奴隷労働が画一的な単純労働であったとの見解を否定し、奴隷社会のなかにも複雑な階層組織が形成されており、しかもそれが職業上のピラミッドと密接に関連していたことを明らかにする。そこでは奴隷制の枠内とはいえ、物的報酬その他の形で、インセンティブ・システムがとられていたという。なおこの点は第4章においても、奴隷の所得水準が決して一様なものではなかったことと関連して詳細に検討されることになる。つぎに地域間分布の変化については、著者たちは、このような変化を生じさせた要因を綿に対する需要の急増と輸送の改善に求める。そして奴隷移動の大部分(84%)は主人である奴隷所有者と共になされたものであることを主張する。このことは同時に、地域間売買によって生じる黒人家庭の崩壊や幼児売買の可能性を過大視することを戒めることになる。このような移動の重要性に比べれば、奴隷売買市場の比重は僅かなものであった。しかも奴隷購入は投機目的ではなく、労働力の使用を主目的としたものであった。また奴隷労働力の賃貸市場も発達しており、そこでの取引は売買取引の5倍にも達していたという。

南部奴隷制についての以上のような素描を背景に、第3章以降ではさきにのべた通説の再検討が試みられることになる。第3章ではプランテーションの収益性について、先行的な研究成果と著者たち自身による再推計の結果が紹介されている。その第1の帰結は、奴隷制農場の経営は高収益をもたらすものであったことである。奴隷所有がかかる収益に動機づけられたものであったとすれば、地位の象徴としての奴隷所有に多くの比重をおくことはできない。第2に、出生率については、東南部の方が西南部よりも若干低く、また農場別には、女・男比の高い農場の方が低いことが明らかにされる。このことは、出生率を高めるために奴隷の性慣習に介入したり、優生学的な操作を加えられたりしという「奴隷飼育の神話」を否定するものにほかならない。そして最後に、綿価格の下落が過剰生産を意味するものではなく、また都市化の進展が奴隷にとって自然上の限界を画するものではなかったことが指摘されるのである。第4章では、奴隷の日常

生活について更に立ち入った考察が加えられる。衣食住・医療・家庭・償罰システム等を検討した結果として、奴隷の生活状態がそれほど悲惨なものではなかったこと、奴隷家庭の安定性を促すための配慮もなされていたことなどがあげられ、奴隷の物的生活条件の改善に努める奴隷所有者の温情主義的側面が浮彫りにされる。このようにして通説の論点をことごとく批判したうえで、著者たちは第5章において、通説が論拠とした資料を再検討する。そのなかには、マルクスも依拠したといわれるオルムステッドの旅行記も含まれている。最後に、第6章においては、「地域別総生産性指数」による暫定的な検証結果を通じて、南部農業が、北部農業よりも非効率的であり、奴隷農場が自由労働者農場よりも非効率的であったという見解に対して、否定的な解答を提示している。著者たちによれば、奴隷農場における収益は、良質な黒人労働と、農場経営者の優れた管理・組織能力が組み合わされてこそ生まれえたものなのである。奴隷所有者が黒人に求めたものは、完全な服従ではなく、奴隷のインセンティブに訴えた最適な服従であったという。さきにのべた南部奴隷性の資本主義的性格は、本書ではこのような経営者像を通じて打ち出されているのである。

しかし奴隷所有者の資本主義的経営者像を確立するにあたって、使用された諸資料と、仮説の設定の基礎となった経済理論、そして帰結についての著者たちの「解釈」のおのおのが、一体どのような比重を持ちえたのであろうか。理論そのものに予めそのような経営者像が内蔵されているときには、統計的検定という手続きが理論のもつ偏りに対して有効な矯正機能を発揮することは、ほとんど期待しえない。従って、経済理論の側からの「解釈」の強制と、著者たち自身による「解釈」とは、何らかの形で峻別しておく必要があると思われる。つぎに、各所で設定される諸仮説相互間の斉合性については、疑問の余地がなくもない。例えば、(2・4)式と(3・1)式、および(6・6)式で示される生産関数の相互関係は、第2巻54頁の脚注だけでは説得的ではない。また回帰の結果をどのように利用するかは、著者たちの判断に委ねられることは当然であるとしても、その判断の根拠となるべき素材に関する情報が省略されている理由は明らかではない。もちろんこれらの事柄は、本書のもつ画期的な意義の前には、ほとんど取るに足らぬ細事である。

【田村紀之】